
桜と蓮華の香り

紫銀 藍鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜と蓮華の香り

【コード】

N9912M

【作者名】

紫銀 藍鷹

【あらすじ】

銀魂トリップ話です。

さくらと蓮華は、銀魂世界にトリップして、恋をしていくが…

的な。

批判や中傷、荒らしは受け付けません、生理的に、うん。

そんなとこ、ヨロシクw

ブログ

仲谷 さくら。

それが私。

1つ言うが、私は二次元が好きだ。

特に「銀魂」を愛しているっ！

今日も私は読書（やはり銀魂）に励んでいる。

「銀魂って面白いよねっ、やっぱりいいよね、銀さん」

私は銀さんが一番好きなの。

だって、私の求めていた理想の男だもの…

ガッンッ

「いってエエエエエエ！……！！……！！……！！……！！」

「うるさい。お前の心が丸聞こえなんだよ、好きなのわかるけどうるさいんだ、何とかしやがれ」

「何をオオオオ！！！！……！！……！！この洞爺湖が貴様をやつつけてやるっ
」！」

「誰が貴様だ」

ガツンッガツンッガツンッガツンッ

「痛い痛い痛い痛い痛い」

「もっと叩けば故障してくれる？故障したら黙ってくれる？」

人を叩くのはやめましょう。

しかも、本の角で。

「痛いってば！聞こえてる？蓮華ちゅわん？」

「何ソレ、私に喧嘩うってんの？」

ガツンツガツンツガツンツ

「おやめ下さいイイイ!!!蓮華様アアア!!!!!!!」

「…そろそろかな？」

蓮華は私の頭を叩くのをやめた。

…紹介遅れた。

この子は、三津 蓮華。

私の親友で、何かとドSだけどいい子だよ。

蓮華は背が高い大人びた少女で、髪を短くしている。

蓮華はあまりファッションをあまり気にしなくて、適当なTシャツにジーパンという、ラフなスタイルを保っている。

「……………ねえ……………ちくちく……………」

「んあ?」

「んあ?じゃなくて……………」

蓮華が叩いてこないぞ……………」

何かあったのかと、蓮華の見た方を私も見た。

蓮華はとても驚いていた。

私だって、驚いた。

「何で……………?本が光ってる……………」

銀魂の本が光っていた。

私達に向かつて。

すると、光はどんどん強くなって…

目が開けていられないくらいに…

「「キヤアアア!!!」」

「蓮華！」

「おくらあ…！」

私達は光の中へ消えていった…

トリッポウウウ……!!???

くさくらside)

「ん……ああ……?」

「あ、起きましたか」

私が起きると、見慣れた男の子の顔が…

「何でだろう新八の顔が見えるよいや絶対そんな事ないはずなんだけどさ何でだろう何でだろうねやっぱり私の頭はおかしくなってるしまったのだろうかって……ええええエエ!!!!???」

思わず叫んでしまった。

新八くんは軽蔑の目を向けてきた。

ちよっ…そんなに見つめないで、恥ずかしい…じゃなくて！

「えっと…、ここ…って万事屋だよな？」

「そうですね…僕、志村新八って言います。あの女の子は神楽ちやん、あそこでソファアにぶんぞり返っているのは坂田銀時って言うて、この万事屋銀ちゃんの前社長です」

新八くんはニコリと笑いながら、私に「貴女の名前は？」と聞いた。

「私は…仲谷さくらって言うの…」

「さくらさんですか。銀さんに起きたって言うてきますね。ついでに、何か食べるものも持ってきます」

新八くんは「それでは」と言って、襖を閉めていった。

私はそこで気付く。

「こゝ、銀さんが寝てる和室じゃん。」

銀さん達、わざわざ私の為に布団と和室を貸してくれたの？

…嬉しい。

そう思っただけで、と笑っていると、襖が開いた。

「何で笑ってるの？」

「あつ、銀さんだっ！」

「そうだけどよ…仲谷さくらちゃんだろ？」

「新八くんから聞いたんだね。うん、改めまして、私仲谷さくらと言っの。よろしくね」

銀さんは「ウッ」と言った。

ちよつ、私の笑顔が悪いの？

悪かったのか…！

すると、開けたままの襖の向こうから、新八くんが出てきた。

お粥を持って。

「失礼します。さくらさん、お粥持ってきましたよ」

何故だろう。

ニコリと笑う新八くんの笑顔が……………可愛いつ…！！！！

バカだよ私、バカなんだよ私。

だけどね、後悔はしてねえぜっ！

「ありがとう、新八くんっ。お粥なんて久しぶりかも。最近、ろくな食事してなくてさ」

「え？」

「私、最近お母さん死んじゃったし。お父さんは私が生まれる前から死んじゃってるし。正直、食べ物に困ってるね」

「そうなんですか……」

と、私達の間には重い空気が流れた。

「あつ、でも落ち込んでないし！今、こうして笑っていられたらそれでもいいし！」

私はあははと笑う。

本当は、怖いよ。

一人きりで泣いて、泣いて、泣いて。

ただどね、誰にも悟られちゃいけないの。

悟られたのは、蓮華だけ。

私が辛かった時、知ってたのは蓮華。

だから親友なんだよ。

私はお粥を食べた。

「熱っ…!!!!」

「だ、大丈夫ですか!」

「うん。少し溢しちゃったごめんね」

「別にそれはいいですけど…服、汚れてますよ?」

「いやあ、これくらい。どうせ、従姉のお古だし」

私は着ていたワンピースを見た。

可愛いけど、私の好みじゃなかったんだよね、これ。

もったいないから、部屋着にしてたけど、もういいよね？

私は引き続きお粥を食べ終えて、「ごちそうさまでした」と手をあわせた。

新八くんは、「じゃ、これ持っていきますね」と、お粥を持っていつてしまった。

新八くんの足音が遠ざかる。

「あのよ…」

新八くんの足音が完全に遠ざかった後、銀さんが口を開いた。

「はい？」

「えっと……その、服……」

「ああ、「コレ」？」

私はワンピースの肩の部分を持ち上げた。

やっぱり、銀魂は江戸なんだからワンピースは珍しいのかな？

「珍しい？」

「いやまあ、珍しいっつーのもあるんだけどよ………その、テーマ
ー遊郭…なのか？」

「遊郭………ああ……！違う違う。私はそんな事してないよっ」

銀さんは「そうか…」と言った後、私にまた聞いてきた。

「じゃあ、何であんなところで寝てたんだよ？」

「あんなところ？」

「ああ。橋の下なんて、危ないぞ？あの橋は特に変な奴が出っから」

ああ、よかった。

もし、ゴミの山とかだったら、きっと銀さん達拾ってくれないよ…

もしかしたら、変な奴に拉致られてたかもしれないっ！

私は恐ろしやくなどと焦りながら、銀さんを見た。

「んと…私、記憶ないんだよねえ。トリップしたから」

「トリシブ？」

銀さんの顔が怪訝そうに私を見た。

あれ？

私、疑われてる？

「ほっ、本当だもんっ！本から光が出て、友達と一緒にこっち来ちゃったんだもんっ！私、嘘なんかつかないもん！」

「わかるけどよ……」

「友達、多分違うところに行っちゃっただけだし！きっとどこかにいるからっ！」

私はまるで駄々をこねる小さい子供のように言っつ。

銀さんは呆れたような顔をしたが、口元は笑っていて、私を見ていた。

「わかった、わかった」

「本当にわかってる？」

「わかってるって」

銀さんは小さく笑っていた。

「あー、もうっ」「などと言っていると、襖がまた開いて、新八くんと神楽ちゃんが出てきた。

神楽ちゃんは私を見るなり、

「可愛いアルーっ！」

と叫び抱きついてきた。

「あわわわわっ！……！神楽ちゃん……だよね？」

「そうアル！さくらはさくらでいいアルか？」

「うんっ！よろしくねえ！」

私はニコツと笑った。

その後。

とりあえず話し合いで、私は万事屋に住ましてもらった事となった。

銀さんは少し嫌そうな顔をしていたが、新八くんの「ま、いいじゃ

ないですか」と、神楽ちゃんの押しにより、澁々了解した。

「よろしくお願いします」

「よろしくアル！」

「「ちら」そよろしくお願いします」

神楽ちゃんと新八くんは私のところへ来てそう言ったが、銀さんは私のところなど来なかった。

もちろん、「よろしく」すら言わない。

寂しいな…

銀さん、私の事嫌いなのかな？

落ち込んでいたら、銀さんは神楽ちゃんと新八くんが私のところからいなくなった後、私の横を通って

「よろしくな」

と、笑って私の頭をポンポンと叩きながら言ってくれた。

カアアア／／／

「銀ちゃん……」

私が振り向いてそう言つと、銀さんは手をヒラヒラさせて万事屋を出て言った。

「わって…トリップなの？」

（蓮華 side）

「……………ん？……………」

「あ、起きやしたぜイ」

「……………は？」

何でだ、何でなんだ。

目の前に銀魂キャラクターの沖田総悟が見えるんだけど。

あり得ない、あり得ない。

だって、ね？

二次元来ちゃいましたー、キャハなんて…

出来るわけねーだろーがぁぁぁ!!!!!!!!!!!!!!

「すみません、何か間違えました。……………さようなら」

「オイ」

また寝ようと、布団を被ろうとしたところ、土方にとめられた。

「つか、土方までいるよ。」

「ついでに近藤「コシラ」も。」

「……………私もとうとうボケたのか……………」

「何だデメエ……………」

「うわぁ、土方の顔に青筋出来てるよ。」

私にや関係ねー…

「…って、また寝ようとするなあああ！！！！」

「…んあ…何でだ…」

「当たり前だろーが！ここは警察だ！寝てえなら、宿でも行ってこい！！」

「トシ…少し落ち着け」

「そうですね、土方さん。せっかく連れてきたのに、また行けだなんて酷いですぜい」

「そーだそーだあ…」

「テメエは黙ってるおお！！！！」

と、まあ小さなコントをした後、私は起こされた。

で。

起こされた後：…なんだが。

私は怒り気味な土方を目の前にし、正座させられている。

土方の両隣には、涼しい顔をした沖田と苦笑いをした近藤がいる。

一つ、言っておくが。

ハーレムだああ、だなんて、どっかのバカ（さくら）みたいな反応など一切しない。

寧ろ、後悔しかしない。

ま、多分それは、私が男性不信だからなんだろう。

相手が例え三次元だろうと二次元だろうと、男性ならば私には関係ない。

「土方…さん、一応言っておくが、私には触れるなよ…。」

「触れるわけねーだろうが」

「沖田…さん？もだぞ。近藤…さんもだぞ」

「わかりやした」

「わかった」

沖田と近藤が頷くのを、私は確認してから、土方を見た。

「まず」

土方は煙草を持ちながら、私を見据えて話す。

「お前の名前は？」

「三津蓮華」

「何であんなところに寝てやがった？」

「あんなところがわからないから答えようがない」

「……………河原の側だ」

「…何でだろうね」

プチリ。

土方は怒ったような風に私を睨むが、それで怖じ気づく私じゃない。

逆に睨み返す。

すると土方は睨むのをやめ、質問を続けた。

「じゃ、その服は何だ？遊郭か何か？」

その言葉に、改めて自分の服装を見た。

そうか。

私、Tシャツにジーパンだもんね。

着物とかの人達には珍しいし、遊郭とかしか思えないよね…

「Tシャツとジーパンです。遊郭じゃないよ。っーかこんなんで遊郭出来るくらい、今の世の中うまくねーよ」

私はいつもと同じ口調で答える。

こんなのでいちいち口調変えてたら、世の中渡っていけない。

しかし、これが土方を怒らしたようぞ。

「テツメエ……話す気あんのかアアア!!!!!!!!!!!!!!」

刀に手をつけ、立ち上がって叫ぶ。

「……話してるじゃん」

「何だコイツ、何でだろうイライラするわ……」

「トシ……だから、少し落ち着けって。な、蓮華さんも、もう少し笑顔で話してあげてくれ」

「……………ん、わかった」

ゴリラでも、近藤ならね。

きいた方がこれ以上安心していられるかなーっ、と。

「わかったよ。土方さん、そこに座って。私もなるべくフレンドリー（笑）に話す」

「チツ…わーったよ」

土方は座った。

すると、近藤が聞いてくる。

「じゃあ、蓮華さんは、どうして着物じゃない服を着ているんだ？」

「えっと…、」

それは、話しづらい。

だって、トリップしただなんて、誰も信じないし？

どっかのバカ（さくら）は言ってんだろうけどなー（大正解）

私は悩んだ後、決心して言った。

「信じないと思いますけど、私、トリップして来たんです」

「…は？」

「皆さんがあり得ないと思う気持ちはよくわかります。実際、トリップした私だって信じられません。今でも。」

しかし、今、こうしてこの世界にいます。私がいた世界は、皆を着物など着ていなくて、私みたいな服を着ています。そして、遊郭や甘味屋などありませんし、切腹だなんて使いません。まず、自殺と言われて止められます。

私の世界にとって、貴方達はマンガの世界の住人です。マンガから、アニメ、それから映画。グッズ販売。貴方達は、有名人と同じ扱いで、誕生日、身長、体重などが公開されます。

…説明すると、こんな感じですよ」

私は最後、そう締めくくり、皆の反応を見た。

やはり、と言っべきか。

土方、沖田、近藤の三人が、全員疑ってるようだ。

「…ま、信じる信じないは勝手ですけどね」

私だったら、信じないし。

それは、仕方がないし。

私がいくら言っても、通じないのはしょうがないし。

私は無駄に弁解しようとは思わないし、ね。

そんな静かな雰囲気の中、最初に口を開いたのは沖田だった。

「証明できるもんはあるんですかイ？」

「……………調べたら？」

「は？」

「調べたらどう？私が江戸にいるかどうか。もともたらないなら、何をした、とかないハズでしょ？」

「…そうか」

なるほど、と言わんばかりの顔をした近藤は、「機械からくりを使おう」と言い出した。

やはり局長だからか、土方も沖田も賛成せざるをえないようだ。

そして、調べる事数分。

「……………ない。蓮華さんの情報が、一つもない」

「住人登録すらねえよ……」

「これは…認るしかねえですねイ……」

「だから言ったじゃない」

私は腕組みしながら、頭を抱えてる三人を見る。

ていうか、あのバカ（もうわかってると思うけど、さくら）はうまくやってるのだろうか。

あー、銀さん達に理由全部話して…のんびりしてそう…（あつてるw）

そんな全く関係ないことを考えながら、天井を見つめた。

「……………あ」

「どっした？」

「…万事屋銀ちゃんってとこ、行ける？」

「行けっけど…」

私の言葉に、土方は困りながら答えた。

「行けるんなら、行きたい。」

「どっしてだよ？」

土方は不思議そうに私を見つめた。

私は「うーん…」と考える。

さくらがいるから、って言うちゃっていいのかな…

ま、いるかどうかすら知らないんだけど、いそつな気がする。

いなかったら、銀さん顔広いんだから、探してもらえばいいし。

私は少し声のトーンを落として言った。

「知り合いが、いるから」

「知り合い？トリップしてきたのに、知り合いがいるのかよ？」

「んと…一緒にトリップしてきた友達がいるかもしれないけど…いなかったら、万事屋さんに探してもらおうと思って…」

「一緒にトリップしてきた友達？」

「うん。私の親友で、私より背が低い女の子」

土方は考えこむ。

行くかどうか、考えてるんだろう。

「よう」

土方が考えている間、声を出したのは近藤だった。

「連れていこう。歩きじゃなんだから、車で」

「え、いいの？」

「女の子に歩かせたらいけないだろう？」

正直、近藤が凄くかつこよく見えた。

そして、私、近藤、土方、沖田は、万事屋に向かうこととなった
：

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9912m/>

桜と蓮華の香り

2010年10月13日04時55分発行